

## 第11回

## 錯覚を楽しむ美術

～だまされて“見る”楽しみ～

美術教育監修・執筆

橋本琢磨

(NHK学園 芸術科 教諭)

錯覚は、我々の知覚をつかさどる脳に起こる現象です。日常において、誰でも気づくようなものから、注意深く観察をしないと見逃してしまうものまで、さまざまな意図を持った錯覚があります。今回は、絵画に用いる錯覚を軸に、錯覚の意図について考えます。今まで見てきたさまざまなものに潜んでいる錯覚に気づく、きっかけになるかもしれません。

学習前  
チェック!

錯覚の仕組みを知り、気づき、コントロールし、楽しむことについて学んでいきます。視覚効果としての錯覚とはどのようなものなのか、具体的に見ていきましょう。

## 錯覚の定義

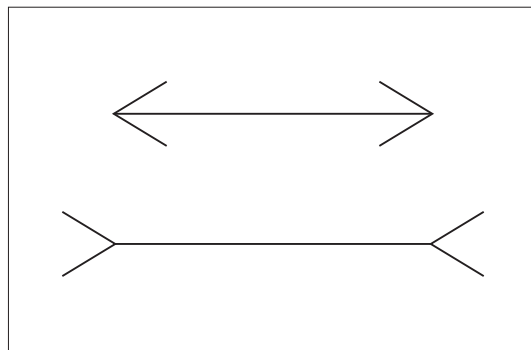
錯覚というのは、目や耳などの感覚器が正常なのにもかかわらず、対象を客観的事実とは異なったものとして脳が知覚してしまう現象です。一定の条件のもとで、誰にでもほぼ同じように起こるものです。対象が存在していないのに知覚してしまう幻視や幻聴などの幻覚は、誰にでも同じように起こるものではないので、錯覚には含まれません。

錯覚にもいろいろあり、聴覚の錯覚である「錯聴」、視覚の錯覚である「錯視」、触覚の錯覚である「錯触」などにわけることができます。今回は、視覚に起こる「錯視」を中心に見ていきましょう。

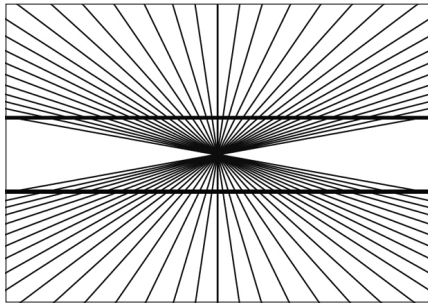
## どのような錯覚があるのでしょうか

「対象を客観的事実とは異なったものとして知覚してしまう現象」である錯覚とは、どういうことなのでしょう。

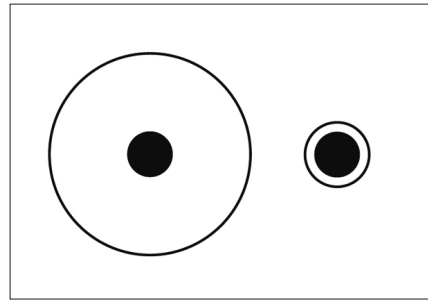
右図の水平方向の横線は、どちらも同じ長さです。これが客観的事実です。しかし、下の横線のほうが長く見えませんか。これが、錯覚です。



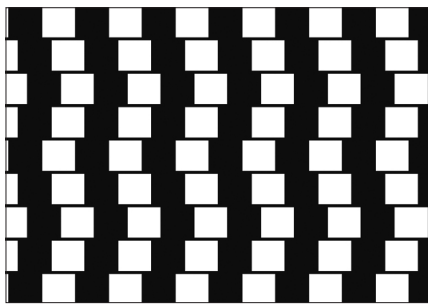
ほかにもいくつかの有名な錯覚の例を見てみましょう。



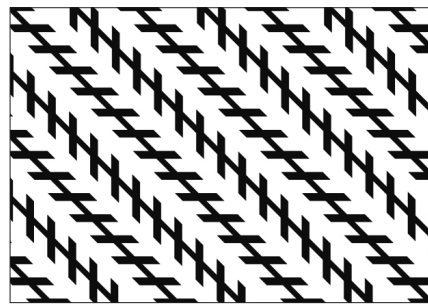
水平方向の横線は、直線です



黒い円は、2つとも同じ大きさです



水平方向の横線は、全て平行です



斜めの直線は、全て平行です

## 錯覚を楽しみます

絵画には、「視覚効果を楽しむ、娯楽としての錯覚」がたくさんあります。番組で紹介するジュゼッペ・アルチンボルドや歌川国芳による顔を描いた作品は、その一例です。それぞれ大きな顔のようにも、野菜や、複数の人体のようにも見えますが、誰でもわかるきわめて簡単な錯覚を利用したものです。

「なにかに見える」という思い出すのは、第8回の番組で学んだ「見立てる」という行為。見立てる場合は、すでにある物を他の物になぞらえて表現するわけですが、錯覚の場合は、すでにある物ではなく、一から作り上げるところが異なっています。そういった意味で、錯覚を用いた美術作品の制作には計画性が要求されます。

錯覚を用いた美術作品の中には、よく見ないことには、錯覚だと気づかないものもあります。17世紀の画家アンドレア・ポッツォは、下から見上げると平らな天井がドームに見えるように天井画を描いています。この天井画は、ある一定の地点から見ると、また別の錯覚により、天井に奥行きを感じ、実際以上の高さに見えるようにも描かれています。

舞台や映画、テレビのセットなどの空間演出では、錯覚がよく利用されています。限られたスペースで劇中の空間を表現するための大道具では、実際以上に広さを感じさせる工夫がなされています。テーマパークなどの建造物でも、道幅を徐々に狭くして実際以上の奥行きを感じさせたり、建物を上へ行くほど小さくして、実際以上の高さを感じさせたりと、錯覚を利用したのを見ることができます。壁紙や塗装で、石や木やレンガなどの実物とは異なる質感に見せかけるものも、ある意味では錯覚です。

さあ、あなたは日常に潜むさまざまな錯覚を見つけることができるでしょうか。